Art Exhibition

art-life+ vol.11 梶岡俊幸展『The Birth Canal-未来へのうねり』

2009 年 4 月 9 日（木）～4 月 26 日（日）
スパイラルガーデン（スパイラル 1F） 11:00～20:00

art-life+

聳え立つ、高さ 5m・横幅 9m の巨大な絵画作品。空間を包み込む、穏やかな“黒”の世界

スパイラルでは、2009年4月9日(木)～26日(日)まで、art-life+シリーズの第11回目として、梶岡俊幸展『The Birth Canal-未来へのうねり』をスパイラルガーデンにて開催致します。

梶岡の作品は、和紙の上に鉛筆と墨で描くという技法で制作されています。一見真っ黒い絵のようですが、巨大な画面は膨大な量の鉛筆の線で埋め尽くされ、その上に大らかに墨が重ねられています。この闇夜に浮かぶ川面は、恐怖感や不安感を感じさせながらも、また同時にゆったりと包み込まれるような穏やかな安らぎも与えます。
本展では、スパイラルガーデンの吹き抜け空間(アトリウム)に510×890cmの巨大な作品がそそり立ち、スパイラルカフェから臨むギャラリーの両壁面にはH182×W1530cmと、H274×W920cmの長大な作品が立ち現れます。まるで映画「2001年宇宙の旅」に登場するモノリスのように、かつて出会ったことのないスケールと質感を持った空間が生み出されるでしょう。

夥しい情報が飛び交う現代では、あらゆる場所が白日の下にさらされていますが、実際には身近な景色の中に多数の濃い闇が存在します。世界は全てが既知ではないと自覚し、未知なる景色に出会ったときに不安を感じながらも、自分の足元を見つめ直し、立ち向かっていく強さの重要性を感じさせます。

「波間に」 H103×W73cm
高知麻紙、墨、鉛筆 2008 年
撮影：市川勝弘

タイトルの「Birth Canal」(産道)には、水面を描いた長大な作品が空間に屹立した時の光景を“運河＝Canal”に見立て、そこから新しい何かが蠢き始める生命の根源としての混沌／闇／水、としての意味が込められています。本展は、予測のつかない時代だからこそ、自らの力で自らの道筋を見出し、日常をより豊かにしていこうというメッセージを放っています。

スパイラルでは、2003 年より次代を担う若手アーティストによるアートプログラム「art-life+」シリーズ(個展)、「art-life」(グループ展)シリーズをスタートしました。当シリーズでは、アーティストの持つ既成概念を超えたユニークな視点や創造性が現実社会に機能し、日常生活を豊かにする可能性を探ります。

掲載や取材に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。
スパイラル／株式会社ワコールアートセンター　広報部　清水、加藤
TEL 03-3498-5605　FAX 03-3498-7848　〒107-0062 東京都港区南青山 5-6-23
E-mail press@spiral.co.jp　WEB www.spiral.co.jp

spiral

展覧会概要

art-life+ vol.11 梶岡俊幸展『The Birth Canal-未来へのうねり』

会期:2009年4月9日(木)～26日(日) 11:00～20:00 会期中無休
＊オープニングレセプション 4月8日(水)20:00～22:00
会場:スパイラルガーデン(スパイラル1F) 〒107-0062東京都港区南青山5-6-23
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」駅B1出口すぐ
入場料:無料
主催:株式会社ワコールアートセンター
企画制作:スパイラル

作家プロフィール

梶岡俊幸 Kajioka Toshiyuki

1978年 東京生まれ
2002年 第2回トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展 優秀賞(豊橋市美術博物館 愛知)同05入選
2003年 第6回「川の絵画大賞展」(加古川総合文化センター 兵庫)
混沌から躍り出る星たち2003(スパイラルガーデン 東京)同04、07
2004年 京都アートアニュアル2004 (京都造形芸術大学 高原校舎 京都)
「日本画の100」展(石田大成社ホール 京都)
2005年 京都造形芸術大学大学院修了 修了制作展 大学院長賞(京都市美術館 京都)
第13期 佐藤国際文化育英財団 奨学生展(佐藤美術館 東京)
METAⅡ展(神奈川県民ホール 神奈川)同07
Xhibitions＃01(miho katsuragi gallery 京都)
第2回 画心展(ワコール銀座アートスペース 東京)
2006年 京都新鋭選抜展(京都文化博物館 京都)
画心展 in KYOTO(ギャラリー恵風 京都)
美大力 14人の作家展(Gallery d.g.画廊はね 東京)
霜月ノ荘厳(豪商稲葉本家 京都)
2008年 Cool Black 展(大丸東京店 東京)

現在、作品のテーマとなっているものは、10年前の体験が元になっています。

空と大地が近付き始める時間、川を渡ろうと橋の上に来て、ふと下を覗きこんだ時でした。在ると思い込んでいた水面は見当らず、目の前には深い闇が広がっていました。その瞬間、町の灯も騒音も消え去り、その闇の中へ放り出されてしまった様に感じました。そこでは、ものとものとの境目が無く、上下左右の感覚も消え、時間の経過も分かりません。そして、しばらくすると、周囲の空間が無限に広がって行くような感覚が沸き起こったのです。

夜、住み慣れた部屋から、常に眺めていた川面。その川面の闇、闇の中の何も無い空間。しかし、何も無いように思えても、そこは、隙間無く何かに満され、バランスを保ちつつ、揺らいでいたのです。

全てを内包した闇。その闇は、計り知れない何かを宿し、どこか懐かしい姿をして、揺らいでいました。そして、そこから私は生まれてきたのかもしれません。その経験をしてから、その時の感覚を呼び覚ませるような作品を描こうと制作を進めて来ました。

その様な想いで絵に筆を入れていると、手の先が徐々に作品の中へ取り込まれて行く様な感覚に陥ります。また、夜の水辺でスケッチをしていると、体から根が生えて、地面に溶け込んでしまい、その景色の一部になるように感じる時もあります。作品を通して闇を見つめていると、全てのものと同化していくように感じます。虚空の中で外皮が無くなり、全てと繋がることが出来るのです。それは以前に自分が、その一部だったことを体が思い出しているかのようです。

そして、いずれ生まれてきた場所に再び包み込まれるであろうとも感じます。

梶岡俊幸